

20 【たいようかめん】

おぼけと時刻（じこく）の関係、おぼけと天候の関係を、こんどの夏休みの自主研究課題（かだい）にしようと、ぼくは決心したことがありました。

まだどんな字を書くかは知らなかったけれども、〈丑三つ時（うしみつどき）〉という言葉は知っていました。

〈丑三つ時〉におぼけがよくでてくる、といわれていることも知っていました。

ぼくの体験上では、〈丑三つ時〉にかぎらないことも、わかっていました。

それで、時刻を研究したいのだけれども、真っ昼間にはおぼけはでにくらしい。

天候も、太陽が皓々（こうこう）と輝いているときにでるおぼけは、さすがにいない。

雪の日は、有名な【ゆきおんな】。

雨の日は、有名な【からかさおぼけ】。

曇の日は、有名な【くもおとこ】。

晴の日は、おもいだそうとしてもでてこない。

そういう話を、懐爺に自慢げに話してみたら、

「そんなことはありません」

と否定されてしまいました。

「ほんまかいな」

「真っ昼間や、太陽が皓々と輝いているときに登場する、おぼけだっているんですよ」

「しらんのう」

「昼間のおぼけの帝王（ていおう）、【たいようかめん】です」

何か、おそろしそうな名前だったけれども、

「げっこうかめんの、なかまかい」

ときいてみると、

「ぜんぜん関係ありません」

との答えでした。

「かめんをとったら、にんげんじゃろが」

「【たいようかめん】のおそろしいところは、仮面と顔とが一体になっているところですよ」

懐爺は、鼻の穴を極度（きょくど）にふくらませました。

「それはおそろしいのう」

ぼくは漫画で、顔の仮面が取れなくなった、男の話を読んだことがありました。

「おそろしいのはそれだけではありません。月光仮面は正義の味方ですが、【たいようかめん】は運命そのものなのですから」

まわりに、ただならない緊張感（きんちょうかん）がはしりました。

「それは、どんないみかのう」

意味はわからなくとも、おそろしかったのです。

「わたしたちには、運命というものがあります。運命には逆らえない。運命に逆らって偉くなっても、運命に逆らって命が助かっても、その後で、もっと悲惨な結果が待っているのです。【たいようかめん】に、みられているのですから」

ますます意味がわからなくなってきたけれども、ますますおそろしくなりました。

「まんまは、ないんかい」

ぼくのいう〈まんま〉は、〈ありのまま〉という意味で、抽象的（ちゅうしょうてき）な話ではなく、具体的（ぐたいてき）な例はないのかということです。

抽象とか具体とかの語彙（ごい）を知らなかったもので、そういったのです。

懐爺は、腕組みをしました。

何かをおもいだそうとする、顔つきでした。

「これは、金ちゃんが生まれる前の、村の出来事です。結婚二十年目の夫婦に、ようやく子どもができて、めでたしめでたしなのですが、その赤ちゃんが、重そうな病気になってしまった。旦那（だんな）さんは自転車を必死にこいで、町の医者を呼びにいった。太陽が皓々と輝く夏の真っ昼間ですから、途中で旦那さんは、ひどく、目がまわってくる。ほとんど、日射病（にっしやびょう）にかかっている。そこに、【たいよう

かめん】の登場です」

ぼくは、唾を飲み込みました。

「どどどんなすがたなんじゃ」

ぼくはききました。

「それこそ、太陽の顔です。その顔に、見上げるまでの巨大な体がついている。体は人間の体に似ていますが、獅子（しし）の体にも似ていません」

「たたた【たいようかめん】」

ぼくは驚きと感動で、その名を叫んでいました。

懐爺は溜息をついてから、続きを話しはじめました。

「【たいようかめん】は、大声で旦那さんにいいます。赤子が死ぬのは運命だ。無理に医者を呼びにいったら、お前も死ぬ。赤子は助からぬから、お前だけでも助かったがよい。この声は運命の声だから逆らうなかれ」

「それで、だんなは、まちにいくのやめたんか」

早く結末が知りたかったぼくは、懐爺をせかせました。

懐爺はまた溜息をついてから、続きを話しはじめました。

「旦那さんは思案します。けれども、烈しい太陽に照らされて、【たいようかめん】の大声に嚇されて、だんだん、身動きが取れなくなってきました。それでも、旦那さんは勇気をふりしぼって、赤子のために必死で自転車をこぐのです」

「ならば、だんなは、しんだんか」

「はい。町に着いたとたん死にました。赤子も同時に死にました。それを悲しんで、奥さんもすぐに死にました」

「せつないのう」

「せつないといってくれるのは、金ちゃんだけです。まわりは、【たいようかめん】に遠慮をして、そんなことはいいません」

「【たいようかめん】は、けしからんのう」

「金ちゃん、これは選択（せんたく）ということです。人生の選択。それをまちがえると、こうなるという証明（しょうめい）です」

「せんたく、たあ、うんめいか」

「運命と選択はちがいますが、運命を受けいれ、正しい選択をしなければ、いけないということです」

「旦那は、ただしい」

ぼくは、断固（だんこ）としていいました。

自分のこどものために、命がけになる親を、正しいといえないのか。

ぼくは、ぼくのために母親が、命がけで仕事をしているのを知っている。

「旦那さんの発想は、個人的情愛です。個人的情愛はだれにもあるし、とてもよいものです。ところが、個人的情愛が、まちがいの元となるのです。みんな自分の家族が大切。みんな自分の生活が大切。みんな自分の国が大切。その発想が戦争を生むのです」

「わしは、なっとくできんのう」

私がそう言うと、懐爺はしきりに肯きました。

「金ちゃんなら、そういうとおもっていました」

「じぶんたいせつ、たにんたいせつ」

言葉足らずだったけれども、生意気なぼくは、自分を大切にできない人が、他人を大切にできるのかと問うたのです。

「【たいようかめん】は、偉大すぎて理解されにくいのです」

懐爺は、そういっただけでした。

懐爺がそういうのなら、そうかもしれない。

もう【たいようかめん】の話は、終わったのです。

ぼくに、疑問が一つ、残りました。

旦那が死んだのなら、旦那が遭遇したという、【たいようかめん】の存在を、いったい誰が伝え残したのか。